記憶ツーリズムにおける語り部の役割
～大槌町を題材として～

21711379yy@tama.ac.jp　　山口雄資

１．研究の目的

2011 年 3 月に起きた東日本大震災により大きな被害を受けた三陸地域。震災から 8 年が経ち、震災が人々の記憶から消えてしまうのではないかと危惧した被災者たちが、人々の防災意識の強化を図る目的で「震災語り部」という活動を行っている。

本研究では、「震災語り部」が記憶ツーリズムにおいて果たす役割を分析し、記憶が将来の三陸を支える観光資源になる条件について考察する。

２．研究方法

（1）　インタビュー調査

おらが大槌夢広場　震災語り部ガイド

（2）　現地調査

陸前高田市、釜石市、宮古市、大槌町

３．現状

現在大槌町で活動を続けている語り部は 2 人である。実際に震災当時の状況を震災跡を通じた実体験を元に語ってもらった。その内容を聴き、自身の被災地への印象の変化が見られ、語り部によるツアーは外部の人間への効果は十分にあるものと実感した。しかし、語り部は年々減少傾向にあり、利用者も少なくなっていることから、人々から震災の記憶は消えつつあるという印象を受けた。

４．観光と被災地の非日常

人はなぜ観光をするのか。それは、非日常体験を求めるためである。日常から脱却し、一時忘れることで、ストレスの解消や新たな地で知見を得ることで、自己拡大も図れる。これ以外にも観光が持つ価値は多種多様である。

一方、被災地の非日常とは、観光とは正反対の価値を持っており、人々が忘れたいと思う負の非日常である。震災語り部は負の非日常を後世に承継することで、人々に防災意識の重要さを伝える。それが震災語り部の役割であるといえる。

さらに、負の非日常体験を観光の非日常資源に変えるには、共感者が増加し、語りの意義が語り部に伝わるポジティブフィードバックの関係をつくることが重要だろう。

５．結論

記憶ツーリズムにおける語り部の役割とは、東日本大震災から約 9 年の月日が経ち、人々から震災の記憶が失われつつある中で、語り部は記憶の承継を行い、今後の災害に対して、人々に警鐘を鳴らし続ける重要な役割である。しかし、大槌町の場合は、負の記憶の共感者を増やす手段が意識されていなかった。

- 参考文献 -

- 総合観光学会 - 復興ツーリズム　「観光学からのメッセージ」2013

- 石井光太 -「遺体、震災、津波の果てに」2014